

## 大（応）神塚古墳（寒川町No.8 遺跡）保存目的のための調査概要

遺跡の名称	大（応）神塚（寒川町 No. 8 遺跡）
調査実施日	平成 31 年 2 月 18 日（月）～3 月 14 日（木）（内 14 日間）
所在地	高座郡寒川町岡田 2385
調査機関	寒川町教育委員会 教育総務課
調査担当	小林秀満
調査面積	約 45 m <sup>2</sup>
調査原因	保存目的
発見遺構	古墳時代：主体部（墓壇、礫塚か） 中近世：溝状遺構、土坑、盗掘坑と思われる土坑 近代：明治期の調査痕
出土遺物	弥生土器片、土師器、須恵器、陶磁器

## 調査成果

大（応）神塚古墳は、寒川町指定重要文化財第 19 号であり、町内唯一の墳丘を保った古墳である。明治 41 年（1908）、東京帝国大学の坪井正五郎氏を中心とした発掘調査が実施された他は、昭和 57 年に神奈川県教育委員会において測量調査を実施したのみである。これらの調査から、前方後円墳であり、5 世紀ごろの造築であろうとされている。

しかし、明治期の調査であり、遺物の出土状況、古墳の範囲や周溝の有無、構築の年代や方法など不明な点が多いのが現状である。

今回、古墳の形態や、範囲、構築年代などの古墳の性格を把握し、今後の保存方法検討のための基礎資料とするための調査を実施した。年度ごとにトレンチを設定し、概ね 3 年で調査、後 2 年で整理、報告書刊行予定である。

平成 30 年度は、当初の計画では前方部にトレンチ設定予定であったが、調査指導者や県教育委員会との協議の結果、平成 29 年度に確認された明治期の調査痕を調査し、主体部の把握を優先することとし、墳頂部に現存する石碑等を避けながら 4 カ所トレンチを設定した。保存目的のため、調査は全て人工にて実施し、基本的には明治期調査痕を調査し、一部墳丘や主体部の状況把握のための最低限度の掘削を実施した。なお明治期調査痕の土はほとんどフルイがけを実施した。また、一部東海大学の学生がボランティアとして調査に参加した。

以下今回の調査で把握した事項を述べる。

## 明治期調査痕について

調査区、期間の制約があり、すべてを調査することはできなかったが、おおよその把握はできた。1～4 トレンチすべてから確認された。

まず 1 トレンチからは明治期調査痕の北端が確認された。南北方向に延び、東西で幅 90 cm 南側は調査区外

に延びる。明治期調査痕の底は、北端は地表下 1.8mほどだが、南側はさらに掘りこまれており、最深部で地表下 2mほどとなった。なお堀込部分については南側の一部のみ調査を実施し、上面で確認にとどめた。掘りこまれている部分には黒色土が充填されていた。その堀込部分以外、明治期痕の大部分が締まりの弱い褐色土が埋め戻し土であり、今回の調査では埋め戻し土の全量をフルイに掛けて点検した結果、本トレンチ内の埋め戻し土中からの遺物の検出頻度が最も高いことが判明した。フルイ掛けの結果、管玉、鉄製品、鉄片などが抽出された。その他、弥生土器片、土師器、須恵器、陶磁器なども確認されている。

2 トレンチからは明治期調査痕の西端が確認された。東西方向に延び、南北幅は 2.5mほどあり、東方向は調査区外となった。明治期調査痕西壁は北壁と違い、現在のトレンチのように垂直に壁を落としていない状況であった。明治期調査痕の底部は現地地表下 2.2mほどで土層の変換が認められたため、この深さまでであった可能性が指摘される。ただし調査区の狭さのため断定はできない。埋土の状況は 1 トレンチとは異なり、下層から上層まで黒色土層で充填されていた。

なお黒色土層の充填後、明治 44 年には発掘記念碑が建設されたが、それに用いたと思われる客土や栗石となる礫敷が検出された。さらにその上には、碑を立て直した際に用いたと思われる客土と栗石とした礫が確認された。客土中からの遺物としては弥生土器片、土師器、須恵器、陶磁器などが確認されている。

3 トレンチからは明治期調査痕の南端が確認された。1 トレンチで確認された幅 90 cmほどの南北方向の南端を確認、また 2 トレンチで確認された幅 2.5mほどの東西方向部分の南肩部分が確認された。東側部分及び北側部分は調査区外に延びている。明治期調査痕の南端については底部までを掘削し確認をした。底部は現地地表下 2.6m まで達していた。埋め戻し土は、下層は黒色土が充填され、中層では 1 トレンチで確認されている褐色土が充填され、さらに上層には黒色土が充填されていた。中層褐色土及び上層黒色土は東側の墳丘斜面に沿うように西が高く、東が低く傾斜し埋め戻しされていた。また南側幅 90 cm部分では上層まで褐色土が充填されており、北部分と対応する様相であった。遺物は弥生土器片、土師器、須恵器、陶磁器などが確認され、フルイ掛けの結果も同様であった。

4 トレンチは明治期調査痕の東西方向の北端と、東端を確認のため設定された。そのため上面確認のみとした。結果北端は確認されたが、東端はトレンチ内では確認できず、さらに東側に延びていた。

これらの結果から、明治期調査痕の様相は以下のとおりである

- ・南北方向は幅 90 cmで長さ 6m、東西方向は幅 2.5mほどで長さ 6m 以上の変形十字のトレンチであったと思われる。東側はさらに延びている様相である。
- ・深さについては北端で地表下 1.8m、南へ行くとさらに深く掘りこまれ、南端では地表下 2.6m までとなる。西端は地表下 2.2m程度と推定され、東側は地表下 2.2m以上となる。
- ・明治期調査痕下層は北端の一部を除き黒色土で充填されている。幅 90cm ほどの南北端部分にはその後褐色土が充填され、さらにその後西方向から黒色土が充填された模様である。
- ・明治期の調査痕は北側を除き現在のようにトレンチの形を整え、垂直に壁を切るということはしていない模様である。
- ・遺物の出土状況や後述の礫の確認などにより、1 トレンチ、北側部分で鉄剣や鏡が確認されたのではと推測される。

また、明治期調査後に建てられた記念碑は明治 44 年建立とされるが、建設後に、コンクリートの土台で建

て替えられた形跡が確認された。

#### 溝状遺構

2 トレンチ内サブトレンチ、南壁付近で確認。東西方向にのび、東側は明治期調査痕に切られている。西側及び南側は調査区外となる。溝下層から宝永スコリアが確認され、おおよそ中近世の遺構と思われる。用途は不明であるが、明治期調査痕で掘削されていない部分は耕作土がみられたため、耕作に関連する遺構とも思われる。

#### 土坑

2 トレンチ、溝状遺構のすぐ北側で確認。東側は明治期調査痕に切られていた。上面形態は方形と思われる。上層で宝永スコリアが確認された。中近世の所作と思われる。

#### 盗掘坑と思われる土坑

1 トレンチ中ほど南壁際で確認された。南側は調査区外、東側は明治期調査痕に切られている。宝永スコリア以下の耕作土と思われる層下より確認されているので、中近世かそれ以前のものと考えられる。東側が浅く、西側が深く掘りこまれている。形態や場所から盗掘坑と想定した。

#### 古墳主体部（墓壙、礫塚か）

明治期調査痕北壁において墳丘構築土を観察のため精査をしたところ、地表下 1.6mほどのところから東西に広がる円礫の集積が確認された。そのため1 トレンチの北端については古墳に関わる主体部の痕跡が遺存しているものと判断し、引き続き調査を行った。

調査は全体を礫が確認された面まで徐々に下げ、状況を確認した。地表下 60 cmほどまでは大部分が近世の耕作等で攪拌された土壌の堆積であった。

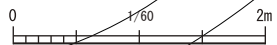
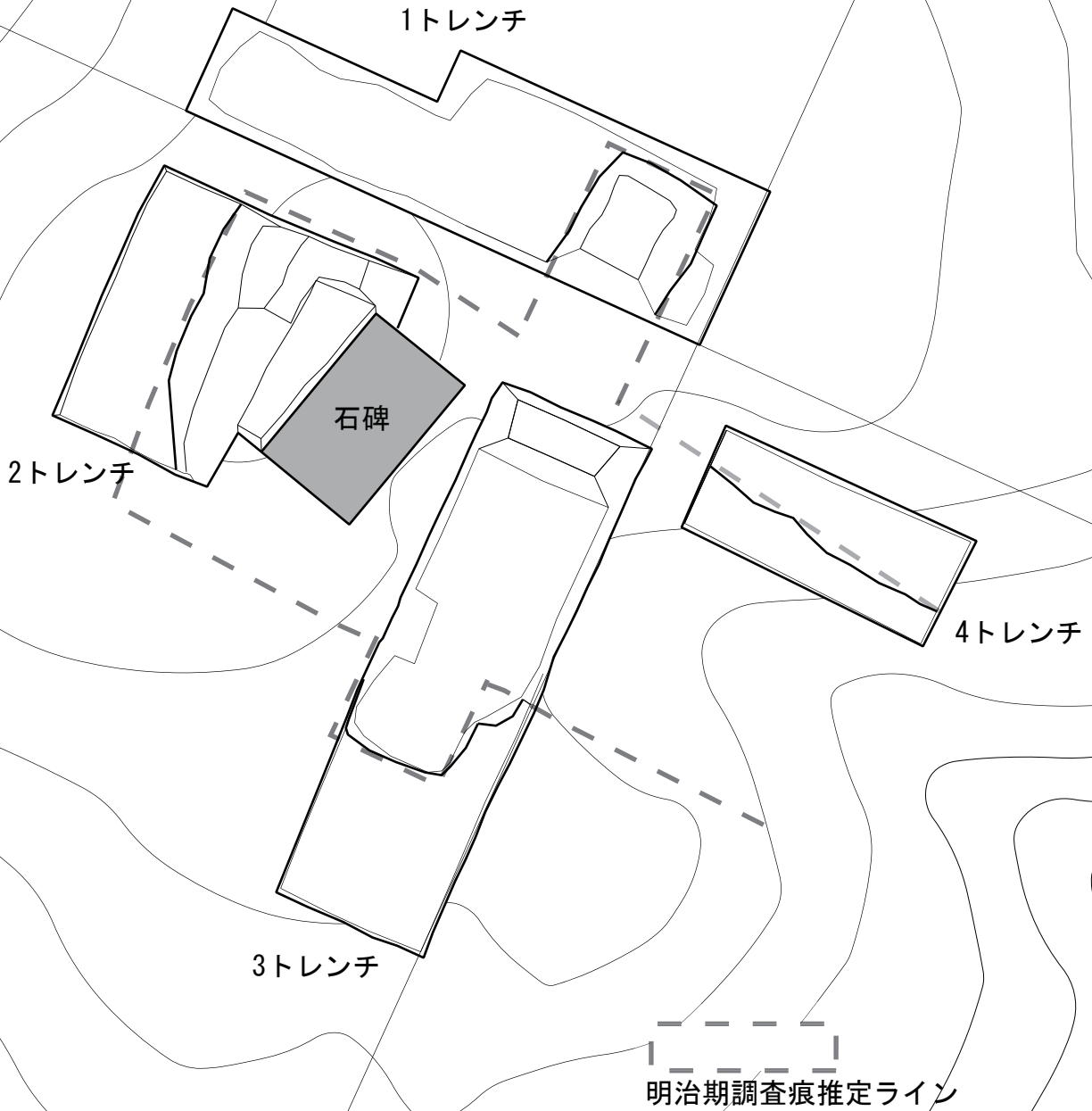
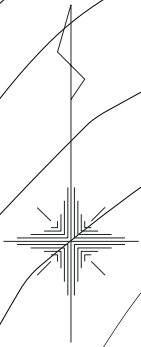
円礫の集積が確認されたのは北壁際であり、南は明治期の調査痕により掘削されていた。礫の集積は東西幅 93 cmの範囲に広がり、中央部がわずかにくぼむ状態で 28 石からなる。検出されたのは明治期の調査痕の北端に顔を出した状態であり、集積はさらに北側に延びると推定される。この礫の集積の上部の土層を観察すると、古墳構築土はローム層を主体とする盛土と思われるが、一般的古墳に見られるような版築状に土を形成しながら盛土を形成している様相ではなく、土をそのまま盛った状況を呈していた。礫の上部は粘土質のローム層主体の土で形成されている状況が見られた。これらの状況から、主体部は構築墓壙ではないかと考えられる。主体部は古墳の軸線に平行する形で南北方向に長軸をもつものだった可能性が高く、南側の大部分は明治期の調査により隠滅していると思われる。

#### 所見

今回の調査で明治期の調査の様相がおおよそ把握できた。墳頂部の大部分をかなりの深さまで掘削している状況であった。そのため主体部の残存はほとんど無いのではと思われたが、北側に一部残存が確認され、その状況から礫塚を伴った構築墓壙である可能性が浮上した。また、1 トレンチの明治期調査埋め土中から

## 資料2

検出された管玉は、硬質緑色凝灰岩製の淡緑色を呈するもので北陸西部系の領域に属する。このタイプの管玉は弥生終末期までは近畿と東海（遠江）までに分布が限定されるものの、4世紀後半になると関東にまで分布が広がる。また明治期に確認された内行花文鏡は、4世紀後半から5世紀初頭に製作された倭製鏡であると判断される。さらに出土した土器を観察すると、古式土師器と思われる土器片が多くを占める。これらことから古墳の構築年代をおおよそ4世紀後半と考えられるのではないだろうか。なお主体部が礫槨ないし礫敷木棺墓である可能性が高いことは、遠江ないし西駿河地域との関連性をうかがわせる。



## 大（応）神塚古墳（寒川町No.8 遺跡）保存目的のための調査計画

### 1. 現状

大（応）神塚古墳は、寒川町指定重要文化財第 19 号であり、町内唯一の墳丘を保った古墳である。明治 41 年（1908）、東京帝国大学の坪井正五郎氏を中心とした発掘調査が実施された他は、昭和 57 年に神奈川県教育委員会において測量調査を実施したのみである。これらの調査から、前方後円墳であり、5 世紀ごろの造築であろうとされている。

しかし、明治期の調査であり、遺物の出土状況、古墳の範囲や周溝の有無、構築の年代や方法など不明な点が多いのが現状である。

### 2. 目的

形態や、範囲、構築年代などの古墳の性格を把握し、今後の保存方法検討のための基礎資料とする。

### 3. 調査体制

主催：寒川町教育委員会

協力：（公財）かながわ考古学財団

作業委託業者：年度ごとの落札業者とする

### 4. 調査計画

#### 1) 墳丘測量調査（平成 28 年度実施）

20 cm、もしくは 25 cm 間隔の等高線図と共に、墳丘の状況をより分かりやすくするため傾斜変換線等も用いて、デジタル測量による墳丘測量図を作成する。

#### 2) 複数の有識者に調査の方針等について、随時意見をいただく。

（平成 28 年度有識者選定、29 年度以降実施）

#### 3) トレンチによる試掘調査（平成 29 年度～令和 3 年度実施）

墳丘測量図作成後、主軸及び副軸を設定し、次のような場所にトレンチを設定し、表面及び断面観察等を交えた調査を実施する。

およその調査の手順は、墳丘の裾部分を中心にトレンチ調査をし、墳丘の形態と規模、周溝の有無を確定する。

次に、埋葬施設の存在を確認するためにトレンチを設定し、併せて墳丘の構築状態について調査する。

ただし、古墳の現況に応じ、調査可能な場所を選定し実施とする。

- ・墳丘規模の確認
- ・周溝の有無の確認（くびれ部、主軸）
- ・墳丘構築状態確認
- ・主体部の構造確認

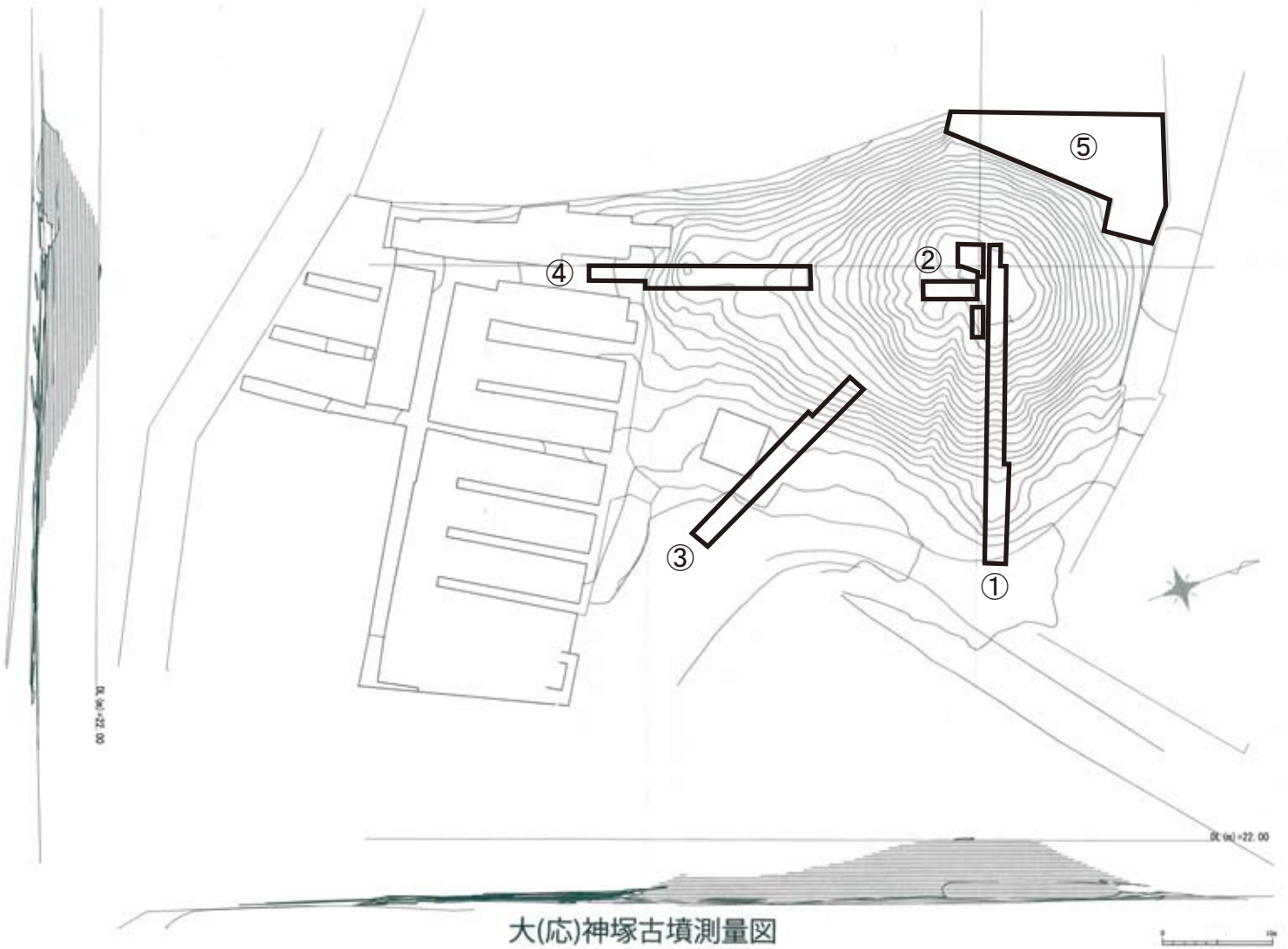
#### 4) 明治 41 年の発掘調査時に出土した遺物の再検証を行う。

#### 5) 整理作業

#### 6) 報告書刊行

\*年に 1～2 本のトレンチ調査を実施予定とし、5 年をめぐりに順次試掘調査を実施。同時に整理作業、過去の遺物の再検証を行い、調査終了後 2 年内をめぐりに報告書を刊行する。

大(応)神塚調査予定箇所



①平成 29 年度

②平成 30 年度

③令和元年度

④令和 2 年度

⑤令和 3 年度

\* 調査指導者の助言等により変更の可能性有